

〇タチキランソウとニシキゴロモについて (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI:

On *Ajuga makinoi* and *A. yezoensis*

タチキランソウ (*Ajuga makinoi*) は 1911 年新種として発表され、かなり古くから知られていたが、その割には充分認識されていない植物である。中井猛之進博士はキランソウ (*A. decumbens*) と比較して、新種として区別したが、最近村田源氏がニシキゴロモ (*A. yezoensis*) と比較しているように、ニシキゴロモに近いものである。タチキランソウの花はキランソウと同じように紫色であるが、茎は花期にほふくせずに斜上すること、花の下唇は先端のへこみの部分に小さな三角状の突起ができる点などでは、キランソウよりニシキゴロモに近い形である。キランソウの花冠は淡紫色であるが、花ののどの部分は白色で 5 本の紫色の条がある。タチキランソウは花冠は全体一様な紫のつよい紅紫色で条はみられない。この点はニシキゴロモの花冠が白色の地に淡紅紫色の条があるのとことなる。ニシキゴロモにくらべて花がやや大きいこと、がく裂片はやや幅が広いこと、花後に茎がのびて地表をはい、葉がいちじるしく大きくなることなどニシキゴロモと区別される点である。分布はかなり広く三河、遠江、駿河、信州南部、甲斐にはかなりしばしばみられるものであり、最近秩父山地および相模丹沢山でもみつがっている。タチキランソウとニシキゴロモとは分布がかさならない。丹沢山でも内側の玄倉川上流はタチキランソウで、稜線をこえた外側はツクバキンモンソウ (*A. yezoensis* var. *tsukubana*) でしめられているようである。上伊那郡戸台川からオオキランソウ (*Ajuga decumbens* var. *vegata*) というものが報告されている。これは一見したところタチキランソウの果期の形に似ているが、花をみると全くキランソウとことならず、タチキランソウとは関係がない。

ニシキゴロモとツクバキンモンソウとは前者が主に日本海側に、後者が太平洋側に分

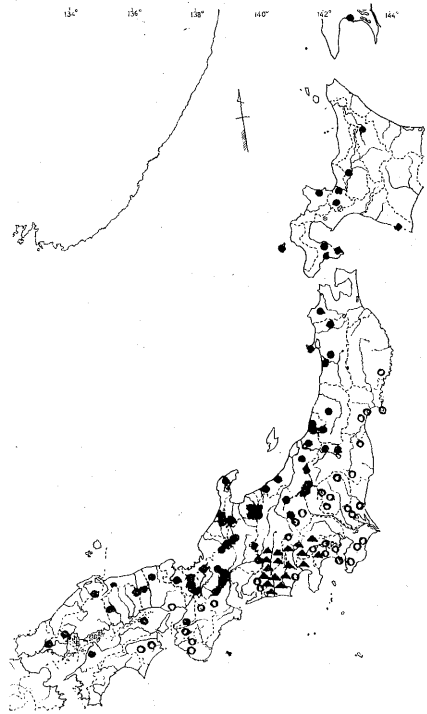


Fig. 1. ● *Ajuga yezoensis*. ○ *A. yezoensis* var. *tsukubana*. ▲ *A. makinoi*

布していることは奥山春季氏 (植物分類地理, 20: 30, 1962) が報告しているので, さらに述べる必要はないが, 花冠上唇の裂片の形には変化があって, 関東のツクバキンモンソウと中部, 東北地方のニシキゴロモとでは, はっきりと区別できるが, ニシキゴロモも中国地方のものでは上唇の裂片の先はやや鈍形となり, 又ツクバキンモンソウも紀伊四国の上唇がやや長くなり, 両者の区別は困難になる。ニシキゴロモとされる型は樺太南部から北海道西南部, 本州では日本海側に分布し, 中国地方では南下して瀬戸内海側にあらわれ, 四国北部までひろがっている。九州北部にあるとされるけれど, そのもととなる標本は果期のもので正確なことはわからない。ツクバキンモンソウは関東地方では海岸近くの山林から 1200 m 位の山地までかなり広く分布している。山梨, 長野, 静岡など中部地方南部ではオオキランソウにおきかわり, ツクバキンモンソウは海近くの低山地にまれにみられるにすぎなくなり, 紀伊, 四国東部に再び現われる。

タチキランソウとニシキゴロモとは, 標本にすると区別がむづかしいが, タチキランソウとみられるものは次の場所が知られる。高度は 100 m から 1400 m に及ぶ。

三河南設楽郡: 新城, 作手, 鳳来寺山; 北設楽郡: 田口, 三輪村, 豊根村, 豊山村。遠江磐田郡: 二又, 富岡村 (Type), 竜山, 水窪, 水窪山住; 榛原郡: 上川根村板取山, 寸又川, 大無間山栗代川; 引佐郡鎮玉村渋川; 信濃下伊那郡: 会地村, 和合村, 清内路村, 念丈岳上松川, 木沢村遠山川, 大鹿村小渋川; 駿河志太郡: 瀬之谷村; 安倍郡: 美和村, 大河内村, 梅島村, 井川村大井川上流赤石渡, 聖沢。静岡竜爪山; 富士郡: 愛鷹山, 毛無山。甲斐西八代郡本栖湖, 北巨摩郡鳳凰山, 小武川。相模丹沢山, 世附川, 玄倉川。武蔵西多摩郡セツ石山。

(東京大学理学部植物学教室)

□ 比較細胞学から得た全生物の分類 Dillon は細胞の形態と性格とを根幹にして, 全生物の分類系を発表した (Dillon, L. S.: A reclassification of the major groups of organisms based upon comparative cytology. Systematic Zoology 12(2): 71-82 (1963)). これは生命の発生と進化を骨子としているが, 全生物を命名の古さから Plantae の Single Kingdom とし, 下に Subkingdom を 13 立てる。

- | | |
|--|---------------------------------------|
| I Gyanophytaria 藍藻類 | VII Euglenophytaria ユーグレナ, 渦鞭藻類 |
| II Thiophytaria 硫黄バクテリア類 | VIII Arcellophytaria simple amoeboids |
| III Rhodobactophytaria 硫黄有色バクテリア類 | IX Amoebophytaria アメーバ類 |
| IV Myxobactophytaria 粘液バクテリア類 | X Enterophytaria |
| V Bactophytaria 真正バクテリア類 | XI Protociliphytaria 鞭毛虫類 |
| VI Saccharophytaria 酵母菌類 | XII Chlorophytaria 緑色植物全部 |
| XIII Chrysophytaria 黄色藻類紅藻, 粘菌, 菌類から後生動物の全部。 | |

この下に 9 つの Province を設け, 最後の 1 province が Metaphaeophyta でこれがさらに 2 分して一つが Phaeophyta (褐藻類) 今一つが Metazoa で全動物がここにひしめいている形になっている。Metazoa に植物の一個の門と同じ高さのものとするのは私も賛成で, 前にそういう扱いをしたが, 要は細かい分化の花盛りの群で相互にそんなに遠くないがやたらと多種多様になったものとは思ふ。がこの Dillon 氏の分類は大胆な提案である。

(前川文夫)